新入会員の紹介

古い茶色の小舟

船越貴穂

浜辺に古びた茶色の小さな舟が
置かれている
小舟は少しづつ海の中へ進んで行く
私は太ももまでスカートをめくり
舟尻を押している
茶色に錆びたような小舟には
同じように茶色になった古い家具が
積まれている
遠い昔　まだ若かった私が使っていた
小さな鏡台
小さなタンス
小さな座敷机
私はこの小舟で何処へ行くつもりなのだろう
やっとのことで舟に乗り移った私を乗せて
小舟はするすると海の上をすべって行く
過去のあなたの所へ行くのか
それとも未来の空の世界に行くのか

和歌山のある寺の僧侶は
四方八方を釘で打ちつけられた箱の舟で
ほんの一握りの食を手に
広い海へ出て行ったそうな
遠い彼岸にある極楽浄土を目指して

私も遠いかの地にある
愛の光に向かって進んでいるのかも知れない
怖くも無く　悲しくも無い
これが死出の旅なのだろうか

目が覚めた
生きていた

船越貴穂（ふなこしたかほ）

三年ほど前、癌を患い遺言書のつもりで書いた詩が「神戸市民文芸」に入選し、七十歳過ぎてから詩を書く事に目覚めました。

今は遺稿集のつもりで詩作に励んでおります。

住所　６５７－００１６

詩やエッセイや短歌、漢詩に至るまで様々な形式表現に込められています。多様で豊かな作品を読ませていただきながら、この冬の出版に向け準備を進めているところです。

この出版の趣旨や経過、募集要項などについてチラシや〆切り延長のお知らせはがき、詩人協会ＨＰなどでお伝えしていますが、会報記録として簡単に経過を報告しておきます。

○３月31日　竹林館にて会報送付作業時の会話の中で、「アンソロジー案」が生まれた。コロナ禍をうけ、会の取組も中止や延期せざる得ない状況の中での企画として、４月委員会に事務局として提案することにする。

○４月19・20日　第３回運営委員会（メールによる）
・コロナをテーマとするアンソロジー発行について
・事務局（北村）から提案。提案の趣旨・おおまかな日程などを報告。論議を経て・９月イベントが中止になった場合、アンソロジー作成に取り組む。
・６月運営会議時のコロナ情勢を見て判断決定する
・作成にあたっては多様な作品が生まれるように工夫するなどを確認する

○６月20日　第４回運営委員会（国労会館）
・「９月イベント」「コロナアンソロジー」の両方を実施する方向で進める。（「９月イベント」は８月運営委員会で中止決定）。
・「アンソロジー」の編集委員、日程、会費などの実施要綱などを確認する。

○７月２日　会報に「アンソロジー２０２０」の参加要項のちらしを折り込み配布する。

○８月15日第５回運営会議（エル大阪）
・「アンソロジー参加者」の状況から、８月30日から、９月15日に〆切り日延長を決定。「９月イベント」の中止とともに、ハガキにて、会員に配布することを確認。

○参加者数83名（９月21日現在）

（文責　北村真）

《ホームページ報告》

《会員の詩》３篇（8月１日～10月31日）
阿形蓉子　「梅干し」
大西久代　「みょうふくさん」
下田喜久美　「実る麦を活ける日」
《会員のエッセイ》
新型コロナが問いかけるもの　岩井洋6月18日
新型コロナウイルス随想　藤谷恵一郎7月1日
バルバラ　左子真由美　2020年8月1日
日記　尾崎まこと　2020年9月1日
《会員の活動》
緊急出版『コロナアンソロジー2020』（原稿締切りを9月15日まで延期）
その他「会員の活動」「会報」の更新あり。
（文責・松村）

「コロナアンソロジー２０２０」取組経過

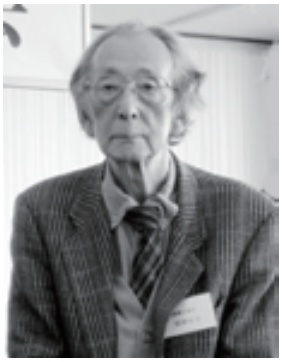
緊急の呼びかけで始まった「コロナアンソロジー」出版の取組について報告します。

７月の会報にチラシを折り込み、緊急なお知らせにもかかわらず、多くの作品が寄せられました。ありがとうございました。

暮らしの中で感じておられる、それぞれの思いが、

村田辰夫君を偲ぶ

薬師川虹一



村田辰夫君は同志社大学予科に入学した時からの友人だ。大学予科三年間と言う人生の春を共に過ごすはずだったが、戦争に負けた日本は、アメリカの言いなりになったのかどうか判らないが、学校制度が根本的に変わることになった。今ではもうほとんど知る人もなくなったが、新制大学と言うものが出来上がって、そのため、今までの大学予科とか高等学校とかが無くなってしまった。

僕たちは、予科三年間と言う青春を失ったのだった。代わって新制大学は、四年間となり、前期二年を一般教養課程、あとの二年間を専門教育課程、と言う形になった。一般教養と言う馴染みのない名前は、リベラル・アーツと言うアメリカ語の翻訳らしい。そこで、リベラル・アーツとは何かと言うことをおしえるための教科書が翻訳されて学生はそれを読まされる羽目になった。リベラルと言うことは何物にも捕らわれない、と言うことであり、アーツはさまざまな学問の集合、つまり、教養と言うことになるのだろう。それを一般教養と言う日本語に置き換えたのは誰なのか知らないが、どうもリベラル・アーツと言う元の言葉がなんだか変なものに替えられたように思う。

と言うことはさておき、わけもわからぬ二年間を過ごした挙句僕たちは専門課程に進むことになった。予科では組が違ったので、顔を合わすことがなかったが、英文科へ進んでみると、そこで村田君と出会うことになった。

学制改革のおかげで、三年待つかわりに二年間を置いて村田君と机を並べることになったわけである。と言っても彼と親しく言葉を交わすようになるにはまだ少し時間が必要だった。彼は、学部を卒業すると、滋賀県の名門膳所高の先生になっていき、僕はすんなりと大学院と言うところへ入ってしまったので、しばらく出会うこともなかった。やがて彼は大学院に戻り、修士課程を経て、梅花女子大学へ就職した。そのころ僕は、二年間堀川高校の先生をした後立命館大学に勤めることになり、村田君も大学の先生になって、本格的にエリオットの研究に乗り出し始めた。一方僕はコールリッジと言う変な詩人の研究をしていたが、エリオットの考えと、コールリッジのそれとは少し似通ったところがあって、そんなことから村田君が時々僕にいろいろ議論をふきかけてくるようになった。

コールリッジには、デスポティズム・オブ・ジ・アイと言う変な言葉がある。「肉眼の専制」と僕は訳している。つまり目で見たものに支配される、と言うことだろう。その肉眼の専制から解放されることが、想像力の働く第一要件だというのだが、一方エリオットには、スチル・ポイントと言う概念があって、どうやらそこら辺りで僕と村田とは出会うことになったらしい。

それ以来僕と村田とは、かなり接近した話題を持ち合わせることになり、当然付き合いも密接になっていった。互いの生い立ちと言うかなりプライベートな面まで喋りあう仲になり、彼の初恋の話まで僕は知ることになっていた。

丁度僕の一年先に生まれた彼は、戦争中、少年通信兵として大陸に渡り、終戦で引き揚げてきたという経験を持っている。戦争体験の皆無な僕は、その点でいつも彼に何かしら引け目を感じていた。いつも一年先を歩いている彼に僕は一年先の自分を見ていたような気がする。そんな彼がいなくなったのだ。僕の人生にぽっかりと穴が開いたような気がするのも当然かもしれない。

村田さんは気胸で入院、退院後、体調悪く、再入院を拒否。7月6日家で静かに逝かれたそうです。今期も国際交流担当委員として働いてくださっていました。写真は二〇一八年総会の時のもの。

前号（98号）以後のコロナに関する動向

5月から日本全国の一日感染者数が百人未満に抑えられていたが、7月に入ってから再燃の様相をみせてきた。8月3日が二千人に近いピークの山曲線を描いた。大阪は東京よりやや遅れて15日の運営委員会の頃に二百人近いピークを迎えていたため、この会報の通り、9月イベントも総会も中止と決定した。

5月24日　国内でコロナの流行が広がった2月、感染症専門家を中心に「専門家会議」が置かれ、三密を避けること、新しい生活様式の提言などをしてきたが、この日から経済専門家も加えた「新しい専門家会議」の組織となった。

6月19日　都道府県を跨ぐ移動が全国的に許可。

7月22日　GoToトラベル・キャンペーン開始（コロナ対策をした旅行施設で、安全な旅行をしましょう。条件に合った旅行へは税金で補助をしますという制度）ただ、同日、日本での感染者795人と最多であった。

8月8日　大阪の公立小中高の夏休みはこの日から24日までとなっているが地域により日程は違っている。いずれにしても例年よりうんと少ない夏休みであった。

8月15日はお盆であったが、種々の盆の行事は取り止めとなり、春の高校野球に続いて夏の甲子園大会も中止となった。

8月28日　安倍首相は辞任を表明した。

9月16日　菅義偉内閣の発足。

《入退会・住所変更》

入会　船越貴穂

逝去　村田辰夫

住所変更

おうえさちこ

会員の活動

あたるしましょうご・中島省吾氏・『入所待ち』が地元の新聞「せんしゅう」7月号に紹介される。

大西久代氏・第16回日本詩歌句随筆評論協会賞の奨励賞を詩「雁おくり」で受賞

北村こう氏・9月15～20日詩画展「To　LIVE」10人の仲間と共に詩画展開催。様子をユーチューブライブ配信https://style16.net/

下田喜久美氏・レバノンのベイルートにあるナジ・ナーマン自由文化財団による「ナジ・ナーマン文学賞2020」受賞

永井ますみ氏・6月27日、鳥取県大山町「有美園」にて「万葉集と山上憶良について」講演と朗読（**内部恵子氏**とともに）をおこなう。また、8月29日福永祥子主宰の「わいわい詩塾」にゲスト出演す。

名古きよえ氏・7月22日トスカーナ芸術鑑定機構より日本画「森の光」30号で「アドルフ・モンテセリ賞」受賞

安森ソノ子氏・ラジオのパーソナリティとして9月6日より「京都の北山　植物の宝庫」を放送。（FM79・7　毎月第一、三日曜日午後2時より）9月30日（水）NHKカルチャーでの研究仲間と共に、京ことばで語る『源氏物語』の内輪での発表を行う。京都四条SETビルにて午後1時より

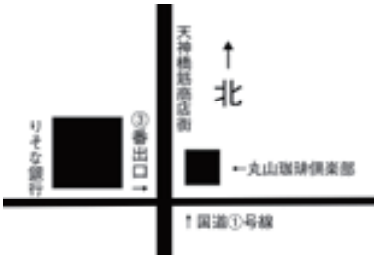
日本国際詩人協会主催のオンラインライブ「Covid-19アンソロジー詩集・詩よ太陽コロナよ、禍を退治しておくれ！」が2020年8月23日にあり、**有馬敲、井上良子、和比古、加納由将、北原千代、下田喜久美、武西良和、森下和真各氏**が参加。ユーチューブの検索「JUNPA詩のライブ」でも見られます。

☆この「会員の活動」欄は自己申告です。3～4行にまとめて、情報を事務局へお報せください。

《今後の活動》

○EARTH　POEM　PROJECT　44
12月13日（日）午後2時～4時
場所　「まつむし音楽堂」
参加費　一〇〇〇円
自由朗読「振り返って今ここ遥かなる」
問合わせ　中尾彰秀 073-422-7248

○詩を朗読する詩人の会「風」
毎月第三日曜日午後2時30分～
場所・変わりました！
「円山珈琲倶楽部」大阪地下鉄南森町③番出口上がると正面
飛び入り朗読歓迎！
10月18日ゲスト阪井達生さん
11月15日　12月20日
問合わせ中尾彰秀073-422-7248



○10月18日（日）に予定しておりました「風フェスティバル2020」は現在のコロナ感染状況に鑑み、残念ながら中止とさせていただくこととなりました。

○詩の実作講座
10月24日（土）第457回　午後6時～9時　講師吉田定一「山本沖子詩集『花の木の椅子』『朝のいのり』をめぐって」
11月28日（土）第458回　午後6時～9時　講師　なし「実作」その場で題を決めて詩をつくります。
12月26日（土）第459回　午後6時～9時講師高丸もと子
左子真由美の詩

《会員が発行または編集する詩誌》

アリゼ197・198号	平雄次
異郷53号	倉紘久
KAIGA　114号	以上健摩
銀河詩手帖300・301号	村口静枝
秋桜15号	原藤久美
このて	近田喜す
現代詩神戸270号	志井ま
軸136号	下原圭治
指名手配創刊号	永相憲一
新燎原35号	佐林尹夫
小さな森	小中子茂
手仕事　2号	関川ひら
花たちばな　2号	山たり比古
遥　2号	もと和三郎
100円詩集10号	熊井由美子
風鐸10号	司真き
P0178号	左子西由く
放課後11号	

《会員発行の詩書》

薬師川虹一翻訳詩集『リジアシムクーテ白い影』竹林館
岸田裕史エッセイ集『詩の彩り』澪標
南　久子詩集『粒子その通過する点点・・』土曜美術社出版販売
速水　晃詩集『島に住んで』蒼穹舎

【詩集短評　山田兼士】

南久子『粒子　その通過する点点・・』第2詩集29篇。日常的な情景を中心に観念や記憶や想像の世界を逍遥するが、主要モチーフは実存的な自己存在だろう。強靭な意志と柔軟な感覚が微細な「粒子」となって遊泳し凝固しつつ点描のような叙景を形成している。散文詩も繊細だ。

速水晃『島に住んで』
長く関西に住んできた著者が還暦を過ぎて石垣島に移住した、その歴史の闇をテーマにした前作『島のいろ―ここは戦場だった』とは対照的に、明るい南国での自然との共生や人々との交友を中心にした一冊だが、時に戦争の影や傷が否応なく滲み出る。巻末の散文詩は名作。

《団体の会報・図書》

いちご通信大分県詩人連盟会報27号
いしかわ詩人会会報49号
茨城県詩人協会会報30号
大分県詩人協会会報157号
岡山県詩人協会だより29
OCOS　226号　大阪文化団体連合会
埼玉詩人会会報93・94号
静岡県詩人会会報140号
詩界通信91号
千葉県詩人クラブ会報250号
中日詩人会会報198号
中四国詩集・二〇二〇　中四国詩人会
二〇二〇年刊詩集　徳島県現代詩協会
栃木県現代詩年鑑2020
長野県詩人協会会報144
日本詩歌句協会会報37号
日本現代詩人会会報159
兵庫県現代詩協会会報47号
福井県詩人懇話会会報103
三重県詩人集28号
宮城県詩人会会報31号

☆これらの会報は事務局に保存しています、ご覧になりたい会員は事務局へ御連絡下さい。

関西詩人協会会報　第99号　発行者　左子真由美
次号原稿〆切り11月末日です

関西詩人協会事務局　〒651-1213　神戸市北区広陵町1－28石井方　永井ますみ　Tel・Fax078-581-9582
編集　永井ますみ　同左
編集担当者のメールアドレス　DZM03624@nifty.com